



教育学研究科  
長崎大学 教職大学院

Graduate School of Education Master of Education (Professional) Program

# NEWS LETTER No.18

ニ ュ ー ス レ タ ー 2021.1

## 教育実践研究フォーラム in 長崎大学 (11月21日開催)



令和2年度のフォーラムは、新型コロナウイルス感染防止のためオンライン開催とした。テーマを「これからの時代に求められる力を育む教育実践を目指して-GIGAスクール構想の実現に向けて」とし、午前と午後のプログラムに分けて実施した。午前中は、大学院生が31名、大学教員、附属学校教員が20名の実践研究内容を30分ずつ最大16ブースに分かれて発表を行い、各ブースでは発表に対して様々な観点からの質疑応答等が展開されていた。各研究のさらなる深化・発展等につながることを期待したい。午後は、サブテーマに基づき、GIGAスクール構想とは何か、また、現在の取組状況や課題、次年度への見通し等について、教育行政担当者、附属学校教員、大学教員の5名のパネラーとコーディネーターによるパネルディスカッションを実施し、県内各地から125名の参加があった。本会が今後のGIGAスクール構想推進の一助になれば幸いである。一日を通しての参加延べ人数は633名であった。初のオンライン開催にもかかわらず多くの方に参加・協力をいただいたことに衷心より謝意を表したい。

### 【プログラム】

- 1 テーマ:これからの時代に求められる力を育む教育実践を目指して -GIGAスクール構想の実現に向けて-
- 2 日程  
 <午前の部> 9:30 ~ 12:00 実践研究発表 51本  
 セッション1(院生①)・・・教科6本、学級経営3本、子ども理解2本、管理職5本 計16本  
 セッション2(院生②)・・・教科5本、学級経営3本、子ども理解2本、管理職5本 計15本  
 セッション3(教員①)・・・大学・附属共同研究5本、附属小3本、附属中2本 計10本  
 セッション4(教員②)・・・大学・附属共同研究5本、大学1本、附属小2本、附属特支1本 計10本  
 <午後の部> 13:00 ~ 14:45 パネルディスカッション  
 「GIGAスクール構想の実現に向けて」  
 (1)全体会開会あいさつ・・・松元浩一 研究科長  
 (2)パネルディスカッション  
 コーディネーター 長崎大学大学院教育学研究科 教授 木村 国広 氏  
 パネラー 長崎県教育庁義務教育課 係長 鶴田 浩一 氏  
 " 長崎市教育研究所 主任指導主事 相浦 太 氏  
 " 長崎大学教育学部附属小学校 教諭 橋元 良太 氏  
 " 長崎大学教育学部附属中学校 教諭 入江 康介 氏  
 " 長崎大学教育学部 准教授 中村 千秋 氏  
 (3)閉会あいさつ・諸連絡

### 実践研究発表



子ども理解・特別支援教育実践コース 佐藤 萌々

実践研究発表では、特別支援教育に関する発表を中心に拝見した。附属校の先生方、先輩方の発表では、丁寧な情報収集やそれに基づく実践計画により、客観的な研究が行われていた。私の研究でも実践する前の段階について綿密に計画していくことが重要だと実感した。また、現在、私が大学院の授業で学んでいることを取り入れて実践している研究発表を聞くことができた。授業では、想像しにくいこともあったが、実践を聞くことで活用の仕方や注意点について学ぶことができた。理論をどのように現場で活用していくかを具体的に考えることができる良い機会となった。様々な方の意見から新たな視点を得ることができ、充実した時間を過ごすことができた。

子ども理解・特別支援教育実践コース 中村 利菜

私が参加したブースでは、大学院生、大学教員、学校現場の先生方、教育センターの方が、それぞれの立場から意見を出し合う、学びの深まる場であった。私は、自分が専門としている特別支援教育についての発表と、自分の専門とは異なる校種についての発表に参加させていただいた。自分の専門としている校種について学びを深めるだけでなく、他の校種についても学ぶことができる機会があることで、自分の視点にはなかった新たな考えに気づくことができたり、自分が専門としている校種との繋がりを考えたりすることができた。ここで得られた知見をもとに、自身の研究や授業を見直したい。また、今後の研究や教育現場に出た際に生かしていきたい。

子ども理解・特別支援教育実践コース 次山 萌

今回のフォーラムは、初のオンライン開催で、参加できる人数に限りがあり、昨年のポスターセッションよりも物足りないのではないかと感じていた。しかし、管理職養成コースの先生方の発表を聞いたことで、学校現場や教育センターなどにおける管理職の先生方の姿勢や目標を知ることができた。また、附属学校の先生方の発表では、子どもたちの反応や授業づくり、授業を行う上での様々な配慮を学ぶことができた。その学びをもとに、自分の授業づくりを振り返ることができた。また、私が参加したセッションでは、活発に意見交換が行われていた。発表者は客観的な意見を得ることができ、参加者は新たな視点を獲得できたため、両者の学びになっている様子が見えた。

学級経営・授業実践開発コース 松永 雄平

近年、ますます社会に開かれた教育課程の重要性が説かれる中で、地域や家庭との協働、カリキュラム・マネジメント、大学・教育委員会・附属校との連携について学ぶことができた。学校教育に求められる役割は多岐にわたり、時代が目まぐるしく変わる中で、学校の連携・協働のあるべき全体像を模索し、子どもたちに求められる資質・能力をどのように育むべきか追究する必要性について示唆を得た。これは、自らの研究テーマとの関わりも深く、研究を一歩前へ進めるものとなった。また、初めてのオンライン開催であったが、様々な立場の方と多くの意見交換し、多角的な視点から新たな学びができた。

学級経営・授業実践開発コース 川尻 ゆい

実践研究発表会に参加して、各分野の専門的な知識を得た。発表者は大学院生だけでなく、大学教授や附属学校の先生方もいらした。オンライン形式で、4つのセッションから1つずつのブースを選択し語り合うことができた。「子どもたちが疑問を持ち、自分ごととして考える」ための、教師の問題提起の仕方や働きかけの重要性について考える機会になった。また、子どもたちの納得解を導き出す方法や、自身の考え方・価値観の変化を実感させる授業展開について具体的な内容を検討する場が多くあることが、教師やこれからの時代を生きていく子どもたちにとって必要だと感じた。多方面から教育を見つめることで、自分の視野を広げ学び続ける姿勢を大切にしたい。

管理職養成コース 江口 敬文

午前中は、様々な立場から、様々なテーマについての発表が予定されており、参加することを楽しみにしていた。今年度の発表はオンライン形式で、4つのセッションから1つずつのブースを選択し参加した。どのブースにおいても、参加者が1つの発表をじっくりと聞くことができたことに加え、発表後、充実した質疑応答がなされたように感じた。本教育実践フォーラムに参加して、各発表はもろもろのこと、他の参加者からもたくさん学びを得るとともに、今後も学び続ける意欲がさらに刺激された。また、自身の研究テーマにかかわりのある発表ブースに参加し、新たな視点や気づきを得ることができたので、今後の学びに生かしていきたい。

### パネルディスカッションの概要



本年度は、新型コロナウイルス感染防止のため、オンライン形式によるパネルディスカッションを実施した。長崎大学大学院教育学研究科、木村国広教授をコーディネーターとして、5名のパネラーが、「GIGAスクール構想の実現に向けて」をテーマに、それぞれの立場での現状や課題、今後の可能性や思いを述べ合った。  
 大学教員の発表では、「GIGAスクール構想」の基本的な理念やその背景、国としてのビジョン等の説明があり、附属校教員の発表では、学校現場の状況や課題、教員が感じている「熱」などが、具体例をもとに示された。教育行政担当者の発表からは、県内の取組状況や今後の見通し、推進の方法や教職員の研修計画等の説明があった。  
 その後、パネラー同士の意見交換や、4名の大学院生からの質疑に対するパネラーの応答があった。「大学」「行政」「学校」という多方面から「GIGAスクール構想」について話を聞くことができ、参加者はより理解を深めることになった。オンラインでの2時間弱の時間が、あっという間に感じてしまう、とても充実した学びとなった。

学級経営・授業実践開発コース 遠谷 優介

パネルディスカッションでは、GIGAスクール構想について、県や市の教育委員会の方々、大学教授、附属小・中学校教諭の方々の話を聞き、現状や今後の見通しについて理解することができた。GIGAスクール構想については、今まさに学校現場は変化しているところで、各学校で試行錯誤を繰り返している段階だ。附属中学校での実践報告では、生徒自身が主体的にタブレット端末を活用していることや、タブレット端末を介して生徒達が教科横断的な学びができていくことが紹介された。その話を聞き、教員側が遅れてはいけないと思った。また、教育委員会の話があったように、失敗を恐れずに挑戦し、困ったときは学ぶときだと考えて、動いていかなければならないと感じた。

学級経営・授業実践開発コース 塩田 悠介

「これからの時代に求められる力を育む教育実践を目指して〜GIGAスクール構想の実現に向けて」というテーマで5名のパネリストにお話しいただいた。長崎県におけるICT環境整備の実態やタブレット端末の導入の見通しなどが示された。また、附属小・中学校におけるGIGAスクール構想を見据えた取組や、先生方が不安感や期待感を抱いていることについて知ることができた。その中でも「タブレット端末が紙と鉛筆に比べて効果的なのか？」という問いが印象に残っている。これからの時代に求められる力の育成を目指してバランスをとりながら端末を活用することが重要であると分かった。パネルディスカッションで学んだことを今後生かしていきたい。

教科授業実践コース 大牟田 歩

パネルディスカッションでは、様々な立場・視点でGIGAスクール構想を見つめることができた。その中で、附属小・中学校による発表が特に印象に残った。国語科「書くこと」においては、タブレット端末の1人1台支給で文章の構成・推敲等の学習が格段にしやすいこと、タイピングを覚えなければならないという課題はあるが、高校卒業後は文書作成ソフトを使う機会が増えることから「鉛筆よりも効果的」な学習になると考える。また、様々な資料が紙媒体でなく電子データでの配付や共有、提出となることで、児童生徒の学校生活や学びの助けとなる可能性も示唆された。新たな取組を前に戸惑いもあるが、生徒の目を輝かせる教師になるために前向きに学び続けたい。

子ども理解・特別支援教育実践コース 岩永 晋

GIGA(Global and Innovation Gateway for All)スクール構想の取組が、コロナ禍にみまわれ加速している。長崎県における現状と課題を知ることができる良い機会となった。県下の義務教育段階における、無線LAN・端末の普及率に関しては全国平均よりも高い位置となっている。一方で、市町村ごとに使用されている端末が異なるという背景を知ることができた。今後、公平で充実したICTが活用される教育現場に移行していくプロセスにおいて、様々な課題が生じると予測される。つまり、「想定できること、想定できないこと」がまだ明確ではない状況であるということだ。パネリストの方々が「早く失敗することが大切である」と発言されたことが印象的だった。様々な問題を共有できる現場であるために、どのような意識と実践が必要なのか考えながら現場でICT活用を図りたい。

子ども理解・特別支援教育実践コース 島 瑞枝

GIGAスクール構想について、県や長崎市の取組、附属小・中学校の実践発表を聞き、大きな学びを得た。COVID-19の影響で学校現場のICT化が加速し、活用するための教員研修が急務となっている。整備面での地域差など課題もあるが、実際に活用できるシステムが構築されてきており、現場の教師がいかに意欲的に活用していくかが重要だと感じた。すべての子どもに適切な学びを保障し、個に応じた学習を展開できるものとして、1人1台のタブレット端末支給はたいへん有効である。コロナ禍での緊急的なオンライン授業に対応できるように、子どもが目を輝かせ、主体的に学び、創造性を育むSociety5.0の学びを進めていけるよう、挑戦心を持って指導力を磨きたい。

管理職養成コース 山田 芳幸

パネルディスカッションでは、5名のパネリストがそれぞれの立場で「GIGAスクール構想」について語り、議論がなされた。参観していた私自身も、その概要と今後の見通しをもつことができた。特に印象に残ったのが、パネリストが発した「少しずつ、着実に、正しく」という言葉である。新たなものの導入に際しては、プラスよりもマイナス要素をより強く考えてしまいがちである。しかし、時間がかかることを十分に意識した上で、タブレット端末が導入される「目的」を見失うことなく、じっくりと取り組んでいく覚悟である。様々な場面での活用が期待され、可能性に溢れている。子供たち、先生たちと一緒に、前向きに取り組んでいきたい。